

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No.359



**2001 OCTOBER**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 2002年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

## カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。(日程を変更しました)

### 記

1. 期間：2002年7月19日(金)～8月26日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

## チベット ニンチン・カンサ(7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。H A Jは既に2回登頂に成功しています。ルートは1998年にH A J隊が初登攀した西稜を予定しています。

### 記

1. 期間：2002年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。

## 表紙写真

サンゲマルマール(バツラ南面から)

カラコルム、ムチチュール氷河の奥のサンゲマルマールが貫禄のある山容をもって、どっしりと構えている。6,949mの標高を持ちながらも、周辺の高峰に囲まれ不遇をかこっている。右奥に「白くたおやかな峰」ディラン(7,257m)が見える。

(文と写真：伊東満)

## ヒマラヤ No.359

- 
- |                   |                |                 |
|-------------------|----------------|-----------------|
| 1. ネコ鯛の峠めぐり       | パキスタン北部4つの峠    | 寺沢 玲子           |
| 8. NEPAL in JAPAN | のお知らせ          | ネパール・ソングートに親しむ会 |
| 10. 回想のバトゥラII     | 初登頂(1978年)     | 伊東 満            |
| 14. ヒマラヤ万華(2)     |                |                 |
| 16. ヒマラヤ・ニュース     | 〈地域ニュース・Books〉 |                 |
| 17. 8,000m峰       | トータル獲得標高2000   | 山森 欣一           |
| 24. 寸感・事務局日誌      |                |                 |
-



ネコ鯛の  
峠めぐり

## パキスタン北部の4つの峠

寺沢 玲子

## はじめに

1999年6月、後ろ髪を引かれる思いを断ち切れないまま、私はキンヤン・キッシュのベースキャンプに向かった。支援メンバーとして参加していた松館正義氏が日パトラベルの督永さんに誘われ、解禁になったばかりのミンタカ峠へ向かうべくフンザから我々と別行動することになったからだ（ヒマラヤ338号参照）。

ある一定年齢以上の登山者や辺境の地愛好者には、ミンタカ峠やキリク峠、カラコルム峠など旧中印国境周辺に対して格別の思いがあるような気がする。かくいう私もその一人である。松館氏を見送りながら、来年こそは何とかミンタカ峠への旅を実現したいと本気で考えていた。

パキスタン在住の大住恵子と9月に予定を決め、同行者を求めることにしていたある日、大住から目の醒めるようなファックスが届いた。「鯛長、隊の名称はネコ鯛でどうでしょう。ネコの我々に小判よりご馳走だと思いませんかミンタカは！んでもってお魚の鯛でネコ鯛！」。そうとなればメンバーは決まったようなもの。1992年サラスワティ隊員白沢真弓と1994年玉虚峰隊員の辻野治子。残念なことに辻野はトレーニング中に膝を痛めてしまい出発直前にリタイヤとなった。

この計画の進行中に、山野井泰史・妙子夫妻からK2の隊長要請があった。山野井夫人である旧姓長尾妙子とは、いつか一緒にトレッキングに出掛けようと話しながら十数年の時が流れてしまっていた。時期的にも好都合だったので、ようやく時期到来と私はその申し出を受けた。そして参加を取りやめた辻野の代わりではないが、K2に参加する飛田からキッチンボーイでも何でもするから参加させて欲しいとの申し出があり、陰の総隊長大住の許可？で飛田も変則的にメンバーとなっ

た。

地名表記については原則として現在の通称を採用したが、文字のないワヒ語やブルシヤスキー語の現地名をウルドゥ語で表記してもらい、更にそれを英語表記したものをカタカナ表記したため、少々違和感を覚える方もおいでかと思うがご了承願いたい。また、概念図は松田徳次郎氏にご協力いただいた。標高については、基本的にロシアの地図から引き出しているが、未だ地図によってまちまちなので、参考に留めていただきたい。余談ながら松田氏は個人的にこの夏、ミンタカ峠からキリク峠周辺の測量に出掛けられている。この地域のより正確な情報を期待している。

## 懐れのミンタカ峠へ

9月2日

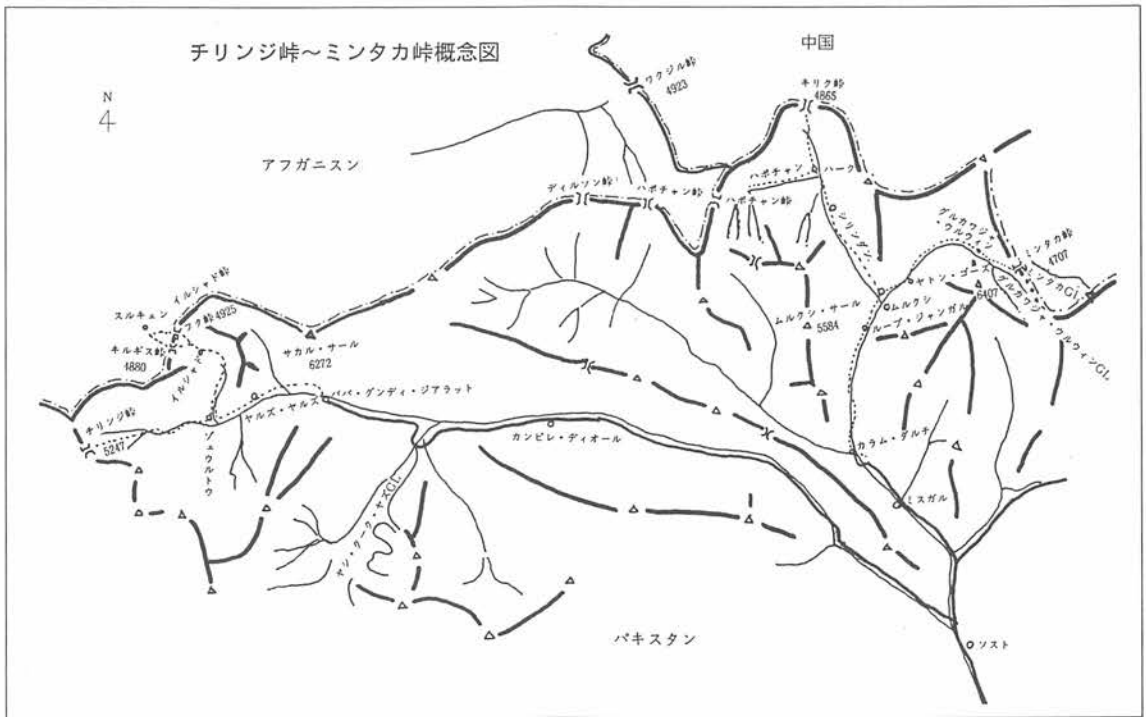
白沢の到着を待って空路ギルギットへ。ギルギットで朝食を、フンザで昼食をのんびりとってもソストには16時20分には着いた。

9月3日

買出しと車やポーターの手配をし、のんびり休養をとる。

9月4日

7時55分ソストを出発。30分ほどでミスガルに着く。昨日依頼していたポーターたちと合流し、カラム・ジル・チーブ橋の手前でジープを乗り捨てる。ミンタカ峠やキリク峠を越えてきたキルギスタンの交易人たちが、パキスタン側からの雑貨やアタと中国製品との交換をしている処に出くわした。迎えの車の日程を打ち合わせて、カラム・ダルチ（現在は旧英国統治時代の要塞に因んでケリー・フォートと呼ばれているという）まで車道を歩く。ディルソン峠との合流点でもあるカラム・ダルチでは、アフガニスタンからディルソン峠を



越えてきた八名四部族のアフガン人一行がお茶の時間を過ごしていた。バダクシャンから来たという老人の言葉に国境の近くにいることを実感し、大住と二人興奮してしまった。カハンワリ、アルバーブ・ブル、ルーン・ヘル、ポート・ヘルと気持ちの良い谷の中を進み、今宵の宿ループ・ジャンガルに到着する。透明な水が豊富に流れる草原で、とても気持ちの良いところだ。

9月5日

曇り空の下、ループ・ジャンガルをあとにする。カーバルを越え、ムルクシ（ムルクシュ）の草原の中を行く。1902年9月15日、中国側からミンタカ峠を越えて来た大谷探検隊の本多恵隆によると、

12戸の民家があったらしいが、現在は放牧のための石積の棲家と廃屋の名残があるのみである。パキスタン陸軍のヘリポート跡もある。キリク川には沢山魚が棲み、ポーターたちはアッという間に何十匹もの魚を手づかみしてきた。フライにして長い昼食タイムをとる。

ここムルクシでキリク川と分かれてミンタカ川沿いに進み、ミンタカ峠を目指す。ポー・ヒルの先で左岸に渡渉し、ヤトン・ゴーズにテントを張る。放牧中の山羊の群れが一斉に囲いに戻る様は圧巻である。新鮮なラッシーやバターをご馳走してもらおう。

9月6日



▲左のコルガミンタカ峠と国境稜線



▲ミンタカ峠。パキスタン側、後方左6407m峰

ヤトン・ゴーズの先で木橋を渡り、また右岸沿いに進む。谷は源頭の相を呈して来る。北東に流れていた谷が急角度で東に向きを変え、その少し下流に北側から顕著な谷が入り組んでくるが、その谷からの大押し出しの黒色のモレーンの山頂に登ると、グルカワジャ・ウルウィン氷河の舌端と目指すミンタカ峠が眼に飛び込んでくる。ミスガルでは、ヤトン・ゴーズからここまでの地域をグルグン・ベルツ、ここからミンタカ峠までをグルフジャウィンと呼んでいるとのこと。眼下の網目状の流れとミンタカ峠の眺望を楽しんでから、グルカワジャ・ウルウィンへ下降する。まだ10時30分だが、ここをBCとして明日峠を往復することにする。飛田は单身偵察に出掛ける。

グルカワジャ・ウルウィンは、インド平原側から峠越えの最後の宿泊場所であったからだろう、立派な石積みの宿泊場所が幾つもあり、広い礎石跡もある。我々はその礎石跡にテントを張った。

9月7日

7時出発。ジグザグの登り道で高度を稼ぐ。カシュ（野生のねぎ）が多く見受けられる。BCからのんびり2時間足らずで峠の入口に着く。高台の岩場からアイベックスやマルホーロ・シープが我々を見下ろしている。高層湿原帯の中を約40分東に進むと急に中国側へと傾斜が落ちていく。峠一帯の国境線と思しき稜線伝いに、1964年建立された中パ国境を示す塔が建てられている。中国側にはなだらかで美しいミンタカ氷河が東に伸びて、源頭にはカマルス(5821m)が聳えている。1902年秋、高山病に苦しみながらこの峠を越えた第一次大谷探検隊に思いをめぐらし、感無量であった。因みに、ミンタカ峠は中国側の呼称で、自分たちはボイ・ヒルと呼ぶとミスガルのポーターたちは言う。

約2時間、峠からの風景を楽しんでからBCに下降する。13時前にはBCに帰り着き、それぞれの時間を過ごす。

9月8日

ムルクシまで戻り、明日からキリク峠を目指すことにする。

### キリク峠へ

▼コック(左)、ガイド(左4)と8人のアフガン人



9月9日

7時30分出発。ひたすらキリク川の左岸に行く。ミンタカ谷方面といくらも離れていないのに、キリク谷はパミールの様を呈している。放牧のためにもキリクの方が良い草が多いとポーターたちは言う。シプ・シェプク、シスゲル・パリーと気持ちよい草地を越え、グンビーシに着く。ここには共産中国から逃れてきたキルギスタン女性と乳飲み子の墓がある。

1900年、オーレル・スタインがキリク峠越えのために宿泊した草原シリン・メダンを過ぎると、かつてのフンザ・ミール、ガザン・カーンのポログランド跡がはっきりと残っている。

気持のよい道をクズ、サドゥブルディと過ぎ、14時今宵の幕営地ハークに着く。ハークには以前フンザ・ミールの休憩所があったとか。

9月10日

6時30分出発。今日はいよいよキリク峠を目指す。キリクとはペルシャ語で「とがった草」を意味するという。

右岸の草原フジャグムと左岸の草原ウィンベルトの間を流れる清流沿いに高度を上げ、ハルトラム・ゴーズの広い草原に行く。ハークの放牧犬が我々についてついて来、ナキウサギを捕まえようと必死になっているが、なかなかうまくいかない。9時10分、峠の一角に到達するが、キリク峠は広大な高層湿原帯で、真の峠の標識を探して歩き回ると、ミンタカ峠と同型の塔があった。9時30分峠に立つ。1900年、悪天候の中、寒さに震えながら分水界点をさぐっていたスタインの姿を想像しながら、確かに今インダスとオクサスの

▼ハークからハポチャン川を遡る。前方はワハン



分水界点にいるのだと思うと、それだけで胸が熱くなる。中国側には轍がついており、軍の見張り所も遥かに視認できる。ミンタカ峠と比較するとキリク峠の方がなだらかである。実際大谷探検隊も、現地では道程の容易さからキリク峠越えを勧められたようである。

なだらかな草原状の山を好き勝手にハーク目指して降りて行く。テント近くでかなりの数の線刻岩絵を見つけ、皆で写真を撮る。ミンタカ峠側では全く眼にすることがなかったので、ハーク周辺の歴史に少なからず興味を抱く。

実は、ミンタカ峠かキリク峠周辺の6千m未満の山に登るのが本来の目的で登山用具を持参していたのだが、この時点で私の気持はすっかり次の峠に移ってしまっていた。大住は私と同じ思いだったから良いものの、飛田と白沢には気の毒なことをした。ポーターたちもこの二つの峠のサポートしか考えていなかったのも、自分たちの食料が不足し、急遽数人が食料調達のため下山することになった。

9月11日

ハークの高台からワハン回廊との境界の山脈が見える。その氷河を遡ると国境ハポチャン峠である。因みにハポチャン峠の名称は二ヶ所あり、一つはディルソン峠の東側にあり、もう一つはここである。その峠に立つことはかなわぬまでも、一目見たいともう一日予定をのぼし、この日ハポチャンまで足を伸ばす。

9月12日

ハークを後にループ・ジャンガルまで下る。韓国山岳会の後援で単身この地域の地図を作ろうと

▼ハークの線刻岩絵



している韓国の青年と出会う。節約のため一人で45キロの荷を担ぎ、ローカルバス以外は使用せず、後日チャプルサン溪谷のババ・グンディ・ジアラット付近で再会した時にも雪の中車道を徒歩で登ってきていた。

9月13日

今日はソストに戻る日である。ループ・ジャンガルからわずか下った森林帯でポーターの一人が子牛を抱いている。聞くと昨夜母牛が産気づいてしまい、そのまま子牛を産み落としてしまったとのこと。当初この母牛は里に返すはずだったが、我々の予定がズルズル延びてしまったためポーターも帰りそびれてしまい、途中出産となってしまった。弱弱しい足取りで少し歩んではベタッと潰れてしまい、母牛に訴えるように切ない泣き声を立てる子牛に詫びながら交代で抱いて下ろうとしたが、勝手に違うせいとか、数分すると降ろせと泣く。そうこうしているうちに母牛も産後の疲れで動けなくなった。結局牛親子とポーターはルーン・ヘルでもう一泊することになった。

カラム・ダルチのインパ分離独立後もしばらくの間ユニオン・ジャックの旗が掲げられていたケリー・フォートは、現在は陸軍管理下にある。中を見学させてもらう。

ミスガルでお茶の招待を受けた後、ソストに戻る。気温が随分下ってきたが、宿のシャワーは水のみ。夕方、薬局で日パトラベルの臨時社員ニガ・バン・シャーに出会う。今年の仕事が終わり、実家に帰るところだという。彼はチャプルサン溪谷スピンジェの出身であるので、急遽我々のサーターとして雇い、ポーターアレンジを依頼する。

▼広大なキリク峠、後方の山は中国領



9月14日

休養、買出し。旅行シーズンが終わったせいか、売店には急に商品が少なくなり、フィルムの補充ができない。

イルシャド峠へ

9月15日

チャプルサン渓谷の右岸を車で行く。途中ニガ・バン・シャーの家で休養し、カンピレ・ディオール、最後の集落ズダ・クンを過ぎヤシ・クーク・ヤズ氷河が近づいてくると、かつて大規模な土石流があったことを証拠づける沢山の流れ山が眼につく。まるでババ・グンディの伝説を裏付けるようだ。

聖廟ババ・グンディ・ジアラットで車を乗り捨てる。聖廟は大規模修復中で人も多く、放牧のヤクや山羊の群れも里に降りる準備を始めているため、随分にぎやかな感じである。

左岸に渡り、サカル・サールを源頭とするサカル・ジュラブ（赤い沢の意）を横切り、広い川原のヤルズ・ヤルズにテントを張る。バダクシャンから白馬に乗った老人が犬を伴って通過していった。

9月16日

8時出発。イルシャドから流れてくる川を横切るとまもなく、コズ・ヤズ氷河とチャプルサン川が合流した氷河の段丘左岸台地の池の辺の草地ゾイ・ウルトォにつく。そこにはアフガン戦争時の宿舎跡やヘリポートがある。放牧に出ていた祖父や父から、旧ソ連軍のヘリコプターがこの上空を飛ぶのを見たことがあると聞かされたことニガ・バ

▼フク峠よりリスク群、右奥遠くにバツラ山群



ンは言う。

イルシャドからの流れの右岸を登りきった川原で左岸に渡り、草原で放牧中のヤクに気を使いながらイルシャドに着く。パミールのヤクはチベットのそれと比較すると随分体格が良い。右岸の5668m峰の不気味なほどに赤い崖壁を題材に、白沢が山岳サスペンスを即興で語り、皆大爆笑。とにかく毎日が楽しい。

9月17日

7時出発。ニガ・バンによれば、イルシャド峠は南北二つの峠の総称で、チャプルサン側では北側の峠をフク(Hhuk:ワヒ人の意)峠、南側の峠をキルギス峠と呼び、主な往来はフク峠を利用してなされているとのこと。先ず北側の峠を目指す。南北の峠間の草地にはヤクが群れをなしている。8時55分、ケルンの積んであるフク峠に到達。峠から望むワハンは意外なことに禿山である。来た道を戻ろうとすると、ニガ・バンが峠を一周しようと言う。彼の実家の放牧地がワハン側にあるし、誰もこないからノー・プロブレムだと言う。少々後ろめたかったが、思い切って下降する。途中狼に襲われたヤクの骨が転がっていた。スルキエン近い峠の分岐に、彼らが尊敬する猟師カリパーの遺体が埋葬されている。お参りした後キルギス峠に向かって登り、下山中貝の化石を数点採集した。

わずかの距離とはいえ、こんなにもあっけなくワハンの一角に足を踏み入れるチャンスが訪れようとは思ってもしなかった。ワハンへの熱い思いを抱き続けている諸先輩の羨望の眼差しが脳裏に浮かんだ。





9月18日

そろそろ疲れも蓄積してきたが、ここまで来たもののついでにチリンジ峠へも足を伸ばそうと欲張る。ゾイ・ウルトゥを過ぎ、ブアタールの手前で渡渉し、ポーターの言うBCへ到着する頃には、空模様が怪しくなる。石積みを修復してテントを張るが、水の確保に苦勞する。

9月19日

怪しげな雲が出ているが、いける所まで行こうと出発する。新雪はなくクレバスの比較的判り易いが、それでもヒドゥン・クレバスを踏み抜く器用な者もいる。のんびり2時間20分の登行でチリンジ峠のトップに着く。チャプルサン側は緩やかな氷河だが、チリンジ氷河側へは黒々とした千枚岩の急斜面が続いている。峠から望むコズ・サル(6677m)やヒンドゥ・ラジの山々の姿が圧巻であった。

何とか一日天候は持ったが、かなり怪しい。

9月20日

ブアタールまで下降する。途中氷河の横断に手間取り、急流を渡る羽目になる。夜半から雪となり、トラバースの雪崩を心配する。

9月21日

朝起きると積雪約15cm。ポーターたちも緊張気味の出発となった。降雪中、老ポーターの指示でポーターたちは、身を切る冷たさの川を我々を背負って渡渉してくれる。ヤルズ・ヤルズで火

を焚き、暖をとり、ババ・グンディ・ジアラットへ向かう。体の芯まで冷え切ってしまった。

迎いのジープに乗り込み、小雪舞う中ソストへと戻る途中、件の韓国青年がジープ道を登ってくるのと出会う。

悪天周期に入ってしまったようで、翌22日には、雪交じりの雨の中フンザに戻り、飛田と大住は久しぶりにアルコールを楽しむ。23日はフンザで休養。昨年まであった本屋は、小さいながら信じられないほど美味しいコーヒーとケーキを出すヨーロッパ人好みの喫茶室に変身していた。

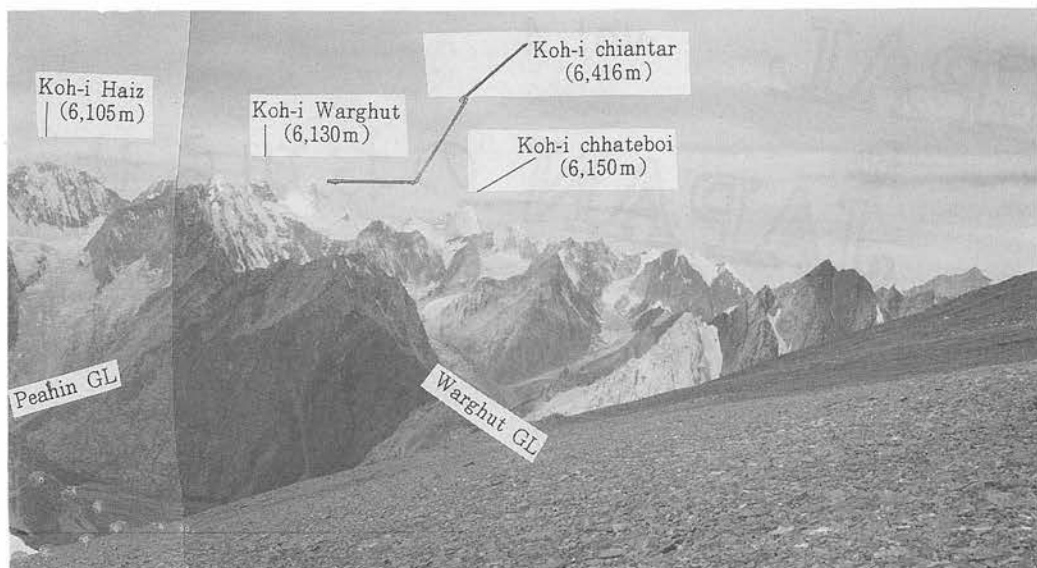
24日、まるで日本の秋のように美しい紅葉のフンザを後にした。

浅学な我々には分不相応な旅であったが、私にとっては高峰の頂に立つに等しい感慨深い旅でも



▲イルシャド付近から峠を望む





あった。同行者たちに深く感謝する。

参加者：寺沢玲子 大住恵子 飛田和夫 白沢真弓

(編注：本記事の関連については岳人651号にカラーで紹介されている)

チリンジ峠、後方チャプルサン谷▶



▼雪の中、ブアタールの渡渉



# NEPAL

vol. 4

## in JAPANのお知らせ

### ネパール・ソングートに親しむ会

私は、日本で唯一のネパール舞踊家（専門的にやっているのはまだ私しかいません）であり、ネパール民族舞踊研究をしております。岡本有子と申します。

ネパールと言えば、先日の事件でまだ皆様の記憶にも新しい国だと思いますが、そんな折に今回のお話をさせて頂くことになったのは（プラス志向で考えまして）だからこそ、増々この企画を実現させ、成功させなければと考えてのことです。

その企画とは、ネパールソングートに親しむ会主催で私がプロデュースを務めます。“素人日本人によるネパール民族伝統舞踊ステージの”ことです。

このステージは、1997年よりネパールで始まり、昨年までで第3回公演をこなしてきています。毎回趣向を凝らした内容で、タイトルは“JAPAN in NEPAL～an encounter with Nepali culture～”といいます。毎年踊り手をその都度募集しますのでその顔ぶれは変わりますが、年々参加者、観客数を増やし、昨年9月のネパール国立劇場の公演では参加者50名、観客数1300人も集め、ネパールの各新聞でも大きく報じられました。



▲日本人によるライ族の踊り、サケラ・シリ

ではなぜそもそも日本人によるネパール舞踊のステージが始まったのか。

#### 現状

1. ネパール（特に若い層）の伝統芸能文化離れが著しい。
2. 豊かなネパール芸能文化がほとんど日本人に知られていない。
3. 第1産業が観光業であるのにもかかわらず、ネパールでは伝統のにとったネパール独自の芸能が外国人のみならず、ネパール人の前でも見せられていないし、保護もされていない。

#### これらの現状から

1. 日本とネパールの文化レベルの交流を高める。
2. 現代のネパールの人々の伝統文化離れに一石を投じる。意外性、インパクト度、日本人たちがこんなにも興味を持っているということを知らせることで、若いアーティストたちの励み、そして一般ネパール人の感心を高める。
3. 日本人に豊かなネパールの芸能文化を知ってもらう。観るだけでなく、体験してもらい、真の援助とは？真の国際交流とは？を考えるきっかけになりたい。

こうして、素人日本人によるネパール舞踊ステージ“JAPAN in NEPAL”は出発しました。

踊り手は私の生徒さん十数人とあとのほとんどは一般公募することになっています。グループダンスが多いので沢山いればいるほどよいのですが、踊り手総勢30～50人は欲しいところです。このステージは観るだけでなく参加型の文化交流ステージだからです。

“JAPAN in NEPAL”——昨年末より私がネパールから日本に拠点を移したことにより、この舞台自体は4回目を迎えますが、今回が日本での第1

回目公演となります。タイトルは日本で行なうということで“NEPAL in JAPAN”と変化します。内容は、一部がネパール生まれのサキャ・ムニ・ブッダの悟りのストーリーをもとに作った無言ミュージカルと二部のネパール伝統民族舞踊です。

[岡本育子のつぶやき]

私は、28年間踊りを続けてきた中で、16年前よりネパール舞踊をネパールにて学び始めました。はじめの頃は、楽しむだけで舞台を踏んでいましたが、今から6年程前、関東のとある大きなNGOグループがネパールからプロのダンサーとミュージシャンを呼んで、学校を建設するためのチャリティコンサートを開いた際、私は大変なショックを受け、その事をきっかけに本腰を入れてネパール芸能文化を知らしめる活動を始めました。

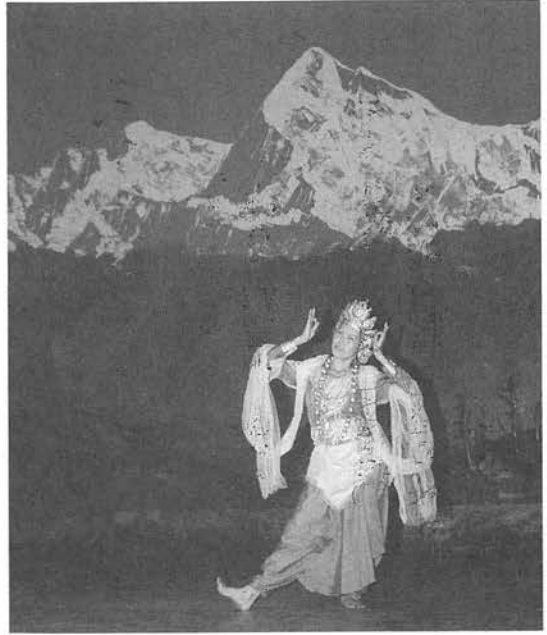
そのコンサートの会場でのこと、司会者が言いました。「これからネパールよりはるばるやってきた彼らが、とても楽しげに踊りを踊ってくれます。でも、その後ろに、貧しさがあるのを決して忘れないで下さい。お帰りの際には、あらかじめお渡ししてある封筒に1円でも多くのお金を入れてお帰り下さい。」と。

この言葉を聞いて、私と一緒に見に来ていたネパールの友人たちは憤りを感じずにはいられませんでした。そして、私は同じ日本人としてとても恥ずかしくてしかたがありませんでした。

ネパールについて何も知らない観客たちはその言葉を聞いてどのようなイメージを持ちプロのアーティストたちによるネパール民族芸能を見たのでしょうか。プロのダンサーたちは、ネパールの国、そして文化を知ってもらおうと踊りに来たのです。決して物乞いをするためではなかったのに、そのNGOグループはいわばネパール文化までも蔑んで見てしまう状況を作ってしまったのです。

経済的な順位で言えばネパールは最下位かもしれない。しかし、文化には優劣はありません。ネパールのために骨身を削っているというこんなにも大きなNGOグループですら、ネパールの文化の素晴らしさも知らずに上から下へのただのあわれみだけで見ているという事に私は愕然としました。その国はどのような国なのか、どのような状況なのか、何が問題なのか人々は何を求めているのか……

## ▼日本人によるネパール族密教古典舞踊



真のNGO活動とはなんなのでしょう。

私はこの16年間、そして今現在もネパールの豊かな芸能文化に感動し続けています。そんなネパールの大きな一面を多くの人に知ってもらいたい。60以上もの民族がそれぞれ独自のものを持っているという、まさにネパールは文化の宝庫です。もし、そのことを多くの人が知ったら…哀れみの目で上から下へ見るのではなく、友達としてあるいは敬意を持ってネパールを見ることができるようにはないのでしょうか。

記

期日：2001年12月22日(土)午後2時と午後5時半  
場所：東京、町田市民フォーラム（小田急線、町

田駅徒歩8分、横浜線町田駅徒歩5分）

練習：10月初旬からスタート、週1～2日

その他：レッスン料無料、参加記念Tシャツ授与  
参加費：1人3000円（全て衣装代にあてられます）

（子供、高校生以下半額）

参加条件：5歳以上から上限なし（70歳以上でも大丈夫です。日本人以外でも主旨を理解して頂きやる気のある方、大歓迎）

性別、職業、宗教一斉関係なし!!

チケット代：2,000円（収益金が出た場合は「ネパール・ソングートに親しむ会」を通じてネパール伝統民族芸能保護活動に寄付する。

# 回想のバトゥラⅡ初登頂(1978年)

伊東 満

宮森常雄氏の労作「カラコルム・ヒンズークシュ登山地図」が発刊されたので、紹介するために1978年に私が所属していた山嶺登高会が飛んだハチンダール・キッシュと同時期H A Jが初登頂に成功したバトゥラⅡがある「№5 BATURA GLACIER & HUNZA」の地図を見た。

同地図では、1978年当時、7,163mとされていたハチンダール・キッシュには6,870mの標高が付されており一抹の淋しさを感じた。目をH A Jが初登頂したバトゥラⅡ(当時)に移すと、そこには「Ⅲ」と表示され標高は7,720mとなっていた。同地図の特色の一つは初登頂ルートが赤の破線で表示されているのであるが、H A Jの初登頂ルートがⅢ峰の右手稜線に付けられている。当時の登山隊の報告は、頂上の左手稜線から行われたことを知っていた私は、初登頂者で福島市在住の伊東満隊員に、同地図上の表示について確認を依頼した。その回答が下記文章である。伊東隊員と西郡隊長の同意を得て掲載する。尚、同地図にはこのようなケースが他にもあると思われる。(文責：山森欣一)

## ■はじめに

お手紙拝読いたしました。さて、宮森氏の地図につきましては、小生も購入し、岩と雪の付録として付いていたカムカルテ、バルトロの地図と見比べているところであります。宮森氏の老いても精力的な活躍に敬意を表するところであります。

山森氏のご質問ですが、宮森氏の地図では説明できない部分があり、HK'78(1978年H A JバトゥラⅡ登山隊)がどの山に登ったかからお話しなればと思います。

HK'78がどのピークに登ったかについては、登頂時の天候が悪く写真で証明することができず、誤解を受けやすいことから、小生なりに整理しております。その整理した結果を、隊長の西郡氏に説明の上、山森氏にもお話ししようと思っておりました。実は、平成6年の故亀井氏の法要のときに、西郡氏や山森氏の他、当時の諸先輩にお会いできるのでその時にお話ししよう準備しておりましたが、法要の日を一週間間違ってしまうという私の大失態から、そのままにしており、その後、『ヒマラヤ名峰事典』が刊行され、「バトゥラⅡ」が「バトゥラⅢ」と解釈されてもそのままにしておりました。

どのような話の順序で説明すればよいのか、話が前後して文章でうまく説明できるかどうかかわか

りませんがご一読をお願いいたします。

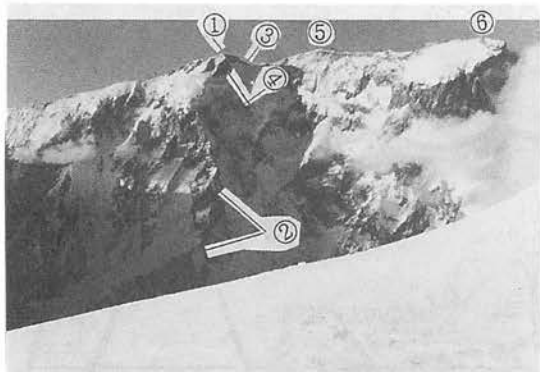
## ■HK'78に登ったピークはどれか

HK'78は、計画どおり目標のピークに登りました。

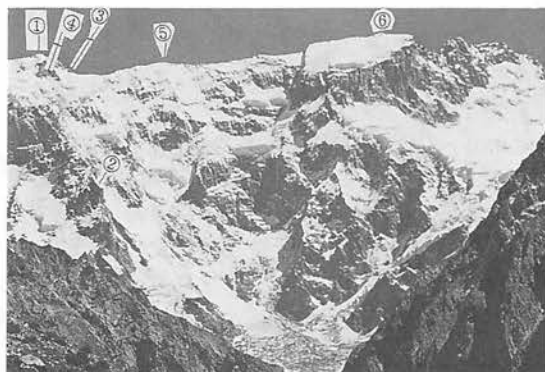
最終キャンプC4を主稜線上に設け、C4から主稜線を東に歩きましたが視界が悪く高い方へ高い方へと歩きました。そんな中、なだらかなところでも最高点かと思われるところがあり、意識して足で踏みました。あまりにも時間が早く、高度計の表示も7,500mと低いため、本当に頂上に着いたのか疑問でした。取りあえず最高点でツェルトを破り、3人[石川裕司(28)、伊東満(27)、大久保真(27)]で協議し更に先に進むことにしました。最高点からさらに東進したところ断崖になり進めなくなり、左に90度(北方向)向きを変え断崖に沿って進んだところ、主稜線は顕著なりッジとなり東に向きを変え断崖に沿って進んだところ、主稜線は顕著なりッジとなり東に向きを変え続いていました。厳しいナイフリッジでここでザイル(といってもFIX用のクレモナ50m)を出し、スタックで進みました。リッジになった部分から下降となりましたが、小さなアップダウンで続いていました。振り返ると頂上部分を壁が囲む様になっており、視界が悪い中でも、その壁の状況を何枚か写真にとりました。ルートが下りとなっ



[写真A]



[写真B]



ていることからすでに頂上は通り越しガスの中に見える壁はBC等から見ていた頂上を取り巻く壁と判断し、リッジの鞍部からそれまでたどったトレースを戻り最高点を頂上として写真をとりました。

「バツラII」周辺の写真としては、『世界の山』の写真([A])、SAKE'78の写真([B])と、広島山の会のカンプレディオールからの写真([C])があります。

HK'78が目指した山は写真[A]、[B]の①のピークです。南西壁に取りついてから頂上まで下りとなる箇所はありません。我々が下り気味にたどったリッジは③であり、振り返ってみた壁は④です。

我々が登ったピークは写真[A]、[B]の①のピークに間違いはありません。

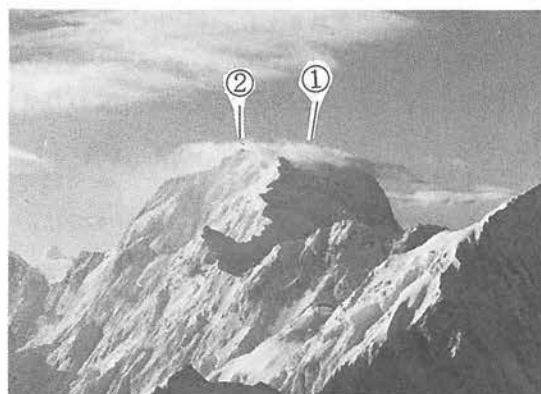
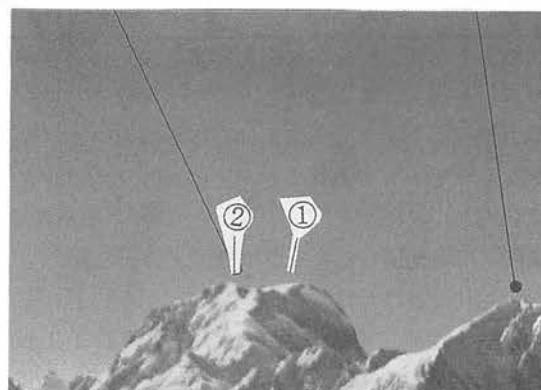
当時、入手できた写真は『世界の山』の写真([A])であり、地図は宮森氏作成の『岩と雪』の付録のもの(以下、「旧地図」とします。)でした。

旧地図では、「バツラII」からバルツール側に稜線がのびており、その稜線は写真[A]、[B]の②の岩稜であり、当初に予定していた登攀ルートであります。当時、写真[A]の①(写真[B]の①)を「バツラII」と認識しており、我々が登ったのは「バツラII」となります。

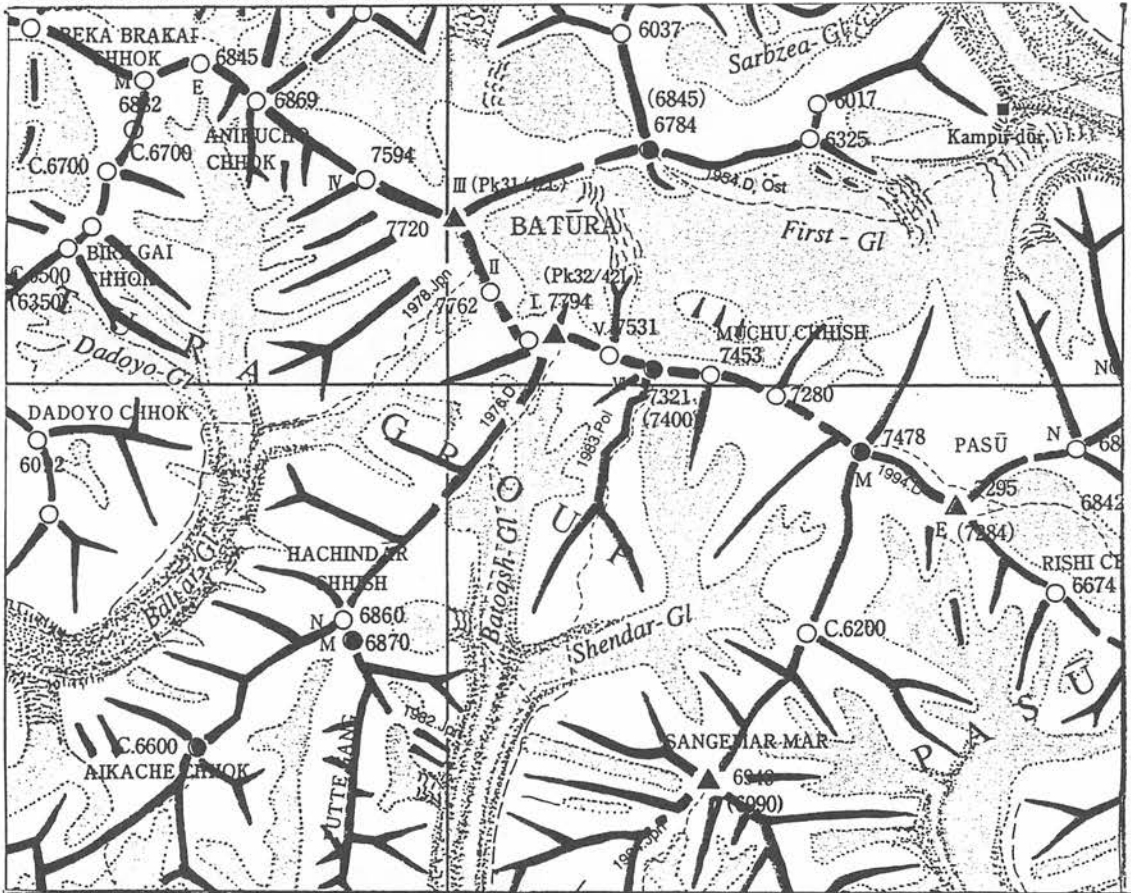
しかし、旧地図では「バツラII」からバツラ氷河側に支稜線がのびております。登頂日の2日前、側壁から主稜線に抜け出た日は天候も良く、

バツラ氷河を見下ろすことができました。その時、バツラ氷河側の側壁を頂上方向(東方向)にのぞきましたが、支稜線は明確にはわかりませんでした。登頂の日は最高点からさらに進みましたが、リッジに変わった地点で振り返ると南側には頂上を取り巻く壁が見えましたが、北側は切れており支稜線のようなものはわかりませんでした。

[写真C]



▼宮森新地図No.5.BATURA GLACIER の部分図



このような頂上付近の状況と写真 [C] から我々が登ったピークを同定すると、頂上は写真 [C] ①のピークであり、北東に伸びる稜線とのジャンクションピークではありません。(②がジャンクションピーク)

■HK'78が登頂したピークは地図上のどこか

今回刊行された地図(以下、「新地図」とします。)と旧地図の違いを見ると、旧地図の「II」が、新地図では「III」となり「I」と「III」の間には「II」が明記されました。新地図は、『ヒマラヤ名峰辞典』に載っているバツラ周辺地図の「I」「II」「III」とほぼ同様の形となっております。

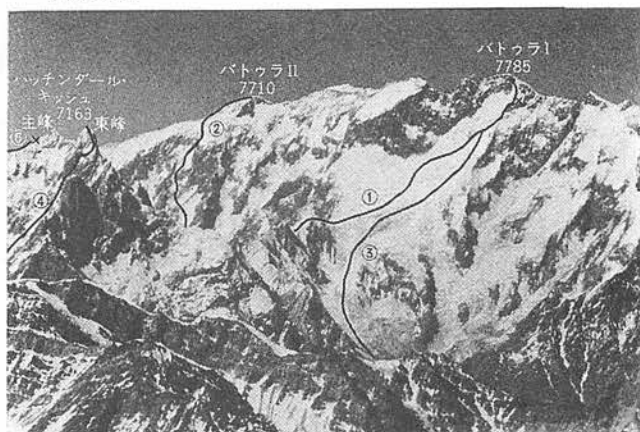
前述しましたように、我々が登ったピークは北東に伸びる稜線とのジャンクションピークではありません。しかし、バルタール側の岩稜につながるピークは間違いはありません。ということは、宮森氏の新地図では説明がつかないことになります。

写真 [B] から(バルタール側から)新地図を検証すると、我々が登頂したピーク①が「III」であれば、写真 [B] で「テーブル状ピーク」と呼んでいた⑥が「I」の左側の○で、我々が登頂したピークと「テーブル状ピーク」の間の⑤が「II」となります。しかし、我々の登ったピークはジャンクションではありませんから「III」から北東に支稜線が伸びていることになると辻褃が合わなくなります。

考えられるのは、新地図上では①と⑤を混同しているのではないかということです。新地図のピークとバルタール側からの写真(写真 [B])を比べた時、①が「III」となりますが、バツラ側から見ると⑤が「III」となり、「テーブル状ピーク」の⑥が「II」となるのではないかと思います。

新地図の解説書『カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究』の74頁の3-10の写真には、「I」、「II」、「IV」が示してあります。これを写真 [B] と対比させると、「II」は⑥、「IV」が①になると思

[写真D]



バトゥラ南面(児玉茂) ①1976年西ドイツ隊ルート、②1978年日本ヒマラヤ協会隊ルート、③1980年日本山岳会学生部ルート(竹中昇単独)、④1982年金沢大学隊ルート、⑤1978年山嶺登高会隊ルート

たかはわかりませんが、頂上直下の部分の支稜線をたどったところが違っているだけです。赤点線が登頂ルートです。

標高についてですが、頂上からの帰路、ギルギットまでの高度計の記録は下記のとおりです。過去の遠征隊の報告書で「宮森氏のアドバイスで、チャルトを2,000mの起点として高度計を合わせた。」との報告を読んだ記憶がありますが、チャルトが2,000mだとすると標高約7,350mとなり、BCを4,200mとすると約7,580mとなりますが、低すぎると思います。7,700mはないにしろ、7,600m台の後半かと思います。7,594mは低すぎると思います。いずれにしろ、トーマンの高度計は低めを示す、との話を聞いたこともあり高度計で標高を議論するのは危ないかなと思っています。

BATURA II 高度測定					
月日	時間	場所	新型	旧型	
7/6	7:30	SUMIT	7,500m	7,500m	
	10:30	C 4	7,350m	7,300m	
7/10	5:50	C 3	6,770m	6,770m	(補正)
	13:45	C 2	6,070m	6,080m	
7/11	10:50	C 1	5,400m	5,400m	(補正)
7/14	7:15	BC	4,200m	4,200m	(補正)
	14:40	SAKEBC	3,370m	3,370m	
7/15	7:20	Baltar	3,600m	3,600m	(補正)
7/16	6:45	Bar	2,600m	2,600m	(補正)
	13:00	Chalt	2,150m	2,170m	
	20:30	GLGITE	1,680m	1,670m	

ます。

■HK'78が登頂したピークは「バトゥラ?峰」

1983年に発刊された「ヒマラヤの高峰 第4巻」のバトゥラ・ムスタグの編者補遺、頁122に、バトゥラ連山の南面の写真が載っています。(写真「D」右欄の地図) この写真には「I」と「II」が明記されているだけで「III」、「IV」はありません。「II」となっているものは、前述したHK'78が登ったピークであり、登攀ルートもほぼ図示のとおりです。

1990年にスイス山岳財団から発行されたワラの地図(以下、「ワラ地図」とします。)があります。これには標高順に「I」から「V」までのピークが明示されています。この地図と写真「D」を比べると、①が「I」、②が「II」、③が「III」、④が「IV」、⑤が「V」となり、地図と写真はほぼ一致します。また、「III」からは北東に、「IV」からは南に支稜線がのびており、説得力を持っています。

HK'78はどのピークに登ったのかと問われれば、写真「D」に示す④であり、それはワラの地図に示す「バトゥラIV」と答えるのが最も正確だと思います。

山名が固有名詞でなく「I」、「II」と数字(記号)で表されているとき、その表記は主峰を中心にする場合や標高順にする場合がありますが、標高順にした場合は測量の成果によって変わることはあることだと思います。

当時は、まだ「I」と「II」の区別だけであったのが、より細かくピークの標高が判明するに従い「III」、「IV」となってきたものと思います。

■登頂ルートと標高

登頂ルートについて、山森氏のご指摘のとおり新地図では誤認があります。頂上へは西側から登ったのであり、新地図のように東側から登ってはおりません。これは、『ヒマラヤ名峰辞典』の「バトゥラIII」の項で、視界が悪かったので頂上からさらに西側に進み引き返した。との解説と同様の誤りであり、東進したのがいつのまにか西進したことになってしまった間違いだと思います。

ワラの地図の登頂ルートの記載には敬服します。ワラが何の資料をもとに我々の登頂ルートを引き

# ヒマラヤ万華(2)

## 八千メートル峰を彩った岳人たち

### ヒマラヤの黄金時代

1950年に人類初の八千メートル峰がフランスの手に落ち、3年後には世界最高峰がイギリスに陥落すると、各国は競って残る八千メートル峰の初登頂を目指してしのぎをけずった。

この初登頂争いは、約10年間続くことになる。それは正しく登山界のオリンピックの様相を呈し、1964年に最後のシシャパンマが中国によって登頂されるまでの間を人よんで「ヒマラヤ黄金時代」と云う。以下はその略史である。

#### [K 2 初登頂、明かされなかった登頂者とボナッティの苦悩]

世界第二の高峰は中国（新疆）とパキスタンの国境に聳えるカラコルムの山である。北の新疆ではチョゴリと呼ばれ、南ではK 2と呼ばれている。

K 2に登ろうとした初めての登山隊は1902年のイギリス隊であったが、北東稜の6,600mに達しただけであった。1909年にはイタリア王の従兄弟で探検家・登山家として名を馳せていたアブルッチ公が登場するが、鳴り物入りでK 2を目指したこの隊も高度的には為すすべもなかった。だが、随行したヴェトリオ・セルラの写真は、カラコルムの自然を紹介し好評を博した。また、チョゴリザに転進し、アブルッチらが7,498mまで達し、当時の最高到達高度を記録した。

深田さんは「ある一つの山に払った努力と犠牲の報償として、登頂の栄冠が与えられるものとしたら、K 2のそれはアメリカに贈りたかった。」と書かれている。アメリカ隊は1938年に7,925m、39年に8,380mに達するものの4名が遭難。第二次大戦後の1953年には7,700mに達したが1名が遭難死していた。

初登頂に成功したのは、1954年のイタリア隊であった。この登山隊にはグラン・キャピサン東壁初登攀で知られ、4年後にはガッシャーブルムIV峰の初登頂者となり、その後ヨーロッパ・アルプスで数々の困難な登攀を行い現代アルピニズムの

第一人者となった24才の若きワルテル・ボナッティが参加していた。

ボナッティは登頂者となる二人のサポートで、7月29日C 8 (7,627m)に荷上げする。その夜はC 8で共にいた登頂者となる一人の調子が思わしくないで、ボナッティはC 9の建設とその後が続くアタックを自分に代わるよう申し入れる。しかし彼は「もし明日C 9への荷上げが終わって君が元気だったら、どちらかが君と代わることもあるだろう」と言われる。

このためボナッティは翌日、不足している荷物をC 9 (8,080m)に上げるために、一旦C 7 (7,345m)まで荷物を取りに降りる。そして、フンザの高所ポーターと二人で再び荷を担ぎC 8を通り越し、先行した登頂者となる二人が張ったC 9直下まで至るが、声はすれどもC 9を見つけれずポーター二人、雪洞を掘って8,000mの高みで何も無くピバークするのである。

二人の登頂者は、ボナッティが荷物をデポしてその日の内にC 8へ下降しているものと思いこんでいた。7月31日午後6時こうして二人は、「大きな氷のくしのような形で、わずかに北に傾いている」K 2の頂上に立ち、世界第二の高峰の頂はイタリアのものとなったのである。

しかし、イタリア隊は暫くの間、登頂者の名前を発表しなかった。登頂者はアキルレ・コンパニョーニ (40才) とリーノ・ラチェデルリ (31才) であった。

K 2の第二登はそれから23年後に日本隊が成し遂げた。決して易しくない南東稜からの登攀は、日本の心無い一部マスコミから「修学旅行」と揶揄されたが、時代と高度を勘案すれば十分に評価されてよい壮挙であった。

[つむじ曲がりテイヒュー42才、秋のチャー・オユーを陥落さす]

中国（チベット）とネパールの国境に位置するチャー・オユーは、現在最も登り易い八千メートル峰として知られる。この山に初めて登山を試み



たのは、1952年のサガルマータをスイス隊に押さえられてしまったイギリス隊であった。春にヒラリーとジョージ・ローの二人がナンパ・ラを南から越えて中国に入り、6,850mまで登った。

初登頂は1954年10月19日。ヘルベルト・ティッヒー率いる小さな登山隊によって果された。隊員3人、シェルパ7人、ポーター27人。ベース・キャンプ設営から登頂まで僅か22日の快挙であった。登頂者は隊員2人とシェルパ1人である。秋ポスト・モンスーンに初登頂された八千メートル峰はチョー・オユーのみ。

ティッヒーの42才は初登頂者としては最高年齢であった。ティッヒーは1936年春に、今はナムナニと呼ばれるグルマ・マングータに変装して登山し7,160mまで登ったという。チョー・オユーの前の年にはネパールを横断している。この時の最終行程での寛ぎの一夜に、バサンから持ち掛けられたのが今回の登山であった。

ゼップ・ヨヒラーは、ヘルマン・ブールとアイガー北壁を、エルンスト・ゼンとマッターホルン北壁を登攀していた。しかしティッヒーは、彼の卓越した登攀技術よりも、彼の人間としての優れた資質が登頂成功につながったと記している。

シェルパのバサン・ダワ・ラマは、テンジン・ノルゲイやアンタルケーと肩を並べるサーダーである。チョモラーリ、ムクト・パルバット、チャウカンバなどの初登頂の記録をもっている。この時のチョー・オユーでは一旦ルクラまで買い出しに降り、ベース・キャンプに戻り3日間で登頂したのである。また、4年後の1958年インド隊のチョー・オユーに参加、息子のソナム・ギャツォと共に登頂した。この時47才であった。

チョー・オユーは、現在最も登り易い八千メートル峰と述べたが、1959年秋フランスの著名な女流登山家で、ヌンの初登頂者としても知られているクロード・コーガンが国際女性隊を率いてこの山に挑戦したが、コーガンを含む隊員2人、シェルパ3人が雪崩のため死亡している。

[幸せな登山に面白い話は無い]

フランス隊が世界第5位のマカルーの頂きに、登攀隊員8名全員とシェルパのギャルツェン・ノルブを送り込み初登頂に成功したのは、1955年5

月15日～17日のことであった。帰国後、記者から登山中のアクシデントについて聞かれた隊長のジャン・フランコが答えたのがタイトルの言葉であった。

マカルー隊の主要メンバーは、人類初の八千メートル峰であるアンナプルナのメンバーにして、当世世界唯一のアルピニストと称せられたリオネル・テレイ、ドリユ西壁で名を上げたギド・マニョーヌ、その西壁の冬期初登頂者であるジャン・クジールから実力者が揃っていた。前年には7,800mまで偵察を済ませており、天候にも恵まれたからフランス隊の成功は当然のことであった。

こうしてみると、フランスが初登頂に成功した八千メートル2座は全く好対照であったことがわかる。ナンナプルナは、偵察もなく、モンスーンの到来と競うように間一発で初登頂に成功したものの、凍傷を負った登頂者のエルゾグとラシュナルを嵐が襲来した第5キャンプから救出しようとするガストン・レビファとテレイ。その脱出行とその後のドラマはあまりにも有名だ。

それにひきかえ5年後のマカルーは、前年の偵察で登路は定まり、軽量の酸素ボンベの開発や、リボリエ博士による高所生理（順応）の研究など、支援態勢の整った中での成功であった。

マカルー登山の中心人物は、なんといってもテレイであろう。ラシュナルと組んで登攀したグラントジョラス北壁ウォーカーバットレスやアイガー北壁の物語は特に有名である。

しかし、アンナプルナとマカルーの初登頂者4名のうち、ラシュナルは、1955年11月25日、ヴァレ・ブランシュでスキー滑降中にクレバスに落ちて死亡。クジールは、1958年11月2日、クレート・デ・ブルガールを登攀中に落石で死亡。テレイもまた、1965年9月22日、ジュルピエの岩場から転落死亡したのであった。そして、マカルー隊の隊長にして登頂者のジャン・フランコは、1971年11月2日交通事故のため死亡。登頂者のギャルツェン・ノルブは、マナスルで今西寿雄と共に初登頂となり、人類初の八千メートル峰2座登頂の栄冠に輝いたが、1961年5月11日ランタン・リルンで雪崩のため死亡したのであった。

(記：山森欣一)

地域ニュース

《パキスタン》

G II に 2 隊が登頂

ガッシャーブルム II (8,035m) に挑戦していた栃木県南地区山岳協議会隊 (大内一成隊長 (59) から12名) は、7月9日、佐々木穂高(29)、佐久間利美(47)、北村誠一(34)、10日には大内隊長、桑川章(49)、11日にも青木丈夫(58)、小林和久(31) 隊員が登頂に成功した。

一方、明治大学隊 (高橋和弘隊長(27)ら6名) は、10日に高橋隊長、早川敦(27)、加藤慶信(25)、森章一(26)、天野和明(23)、谷山宏典(22)の全員が登頂に成功し、次の目標G I に向かった。

HA J 隊、ニンチンカンサに登頂

HA J がニンチン・カンサ (7,206m) に派遣した登山隊 (酒井國光隊長(62)ら6名) は、7月

28日BCを建設し西稜から登頂を目指していたが8月15日、野沢井歩登攀隊長(37)、宮川真一(38)、斎藤正郎(30)両隊員が登頂に成功した。

Books

ネパール登山の手引き (第3版)

HA J 発行の手引き。最新の情報を入れて発行。  
B 5 判 160頁 価格 2000円 送料310円

東京集会のお知らせ

日時 9月24日(月)午後7時～  
内容 ニンチン・カンサ隊登山報告  
場所 HA J ルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL:(03)3740-2674(直)

<p><b>山書散策</b></p> <p>※東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます。</p> <p>1500円</p> <p>河村正之 著</p>	<p><b>登山の運動生理学百科</b></p> <p>「アツいたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。</p> <p>2000円</p> <p>山本正嘉 著</p>	<p><b>さわやかに山へ</b></p> <p>世界的な女性登山家「初音者」シルビア・マリアを歩き山を楽しむ安全下り「ゆる」を提案する。</p> <p>1500円</p> <p>田部井淳子 著</p>	<p><b>中高年登山なんでも百科</b></p> <p>「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の必読の書。</p> <p>1500円</p> <p>福島正明 著</p>	<p><b>新・山靴の音</b></p> <p>選歴をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。</p> <p>1262円</p> <p>芳野満彦 著</p>	<p><b>改訂増補六十歳からの日本三百名山</b></p> <p>60歳から13年間で三百座を踏破したスーパードクターの山行記。</p> <p>1456円</p> <p>田中三郎 著</p>	<p><b>花と歴史の50山</b></p> <p>「花と歴史の山脈」の第2弾。花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。</p> <p>1359円</p> <p>田中澄江 著</p>	<p><b>北アルプス山小屋物語</b></p> <p>歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。</p> <p>1456円</p> <p>柳原修一 著</p>	<p><b>北アルプス やまびと物語</b></p> <p>「岳人に3年余り連載した「山人探訪・男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための冊。</p> <p>1456円</p> <p>柳原修一 著</p>	<p><b>山の百名水</b></p> <p>山岳写真歴30年、北海道利尻から尾久島まで、山の百名水を取材。</p> <p>1553円</p> <p>山下喜一郎 著</p>	<p><b>すぐ役立つ 山の気象と救急法</b></p> <p>山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。</p> <p>1359円</p> <p>飯田睦治郎 著 桜井博幸</p>	<p><b>すぐ役立つ 山の花学</b></p> <p>「飛騨高山の花博士」として知られる著者の、山の花見術入門書。</p> <p>1456円</p> <p>小野木三郎 著</p>	<p><b>山小屋の主人の炉端話</b></p> <p>著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取っ掛きのお話。</p> <p>1500円</p> <p>工藤隆雄 著</p>	<p><b>すぐ役立つ 記念日の山に登ろう</b></p> <p>人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はここに。</p> <p>1300円</p> <p>石井光造 著</p>
---	--	---	--	--	--	--	---	---	--	---	--	---	--

# 8,000m峰

## トータル獲得標高2000

(トップ47 2000.12.31現在 山森欣一作成)

氏名の前の×は死亡 ★=日本人初登頂 ●=無酸素(8,500m級) ↓登頂後帰路死亡

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
01	×山田昇 Yamada Noboru 1950.2.生 9座12回 (101,073m) 冬期3回 初登攀2回 HAT2回 無酸素2回 冬期AP1回	1.ダウラギリI	8,167	1978.10.21	南東稜
		2.カンチェンジュンガM	8,586	1981.5.5	南西面
		3.ダウラギリI	8,167	1982.10.18	北西稜初登攀
		4.ローツェ	8,516	1983.10.9	西面 ★
		5.サガルマータ	8,848	1983.12.16	冬期第三登
		6.K2	8,611	1985.7.24	南東稜 ●
		7.サガルマータ	8,848	1985.10.30	南東稜 ●
		8.マナスル(AP)	8,163	1985.12.14	冬期第二登 HAT-T
		9.アンナプルナI	8,091	1987.12.20	南壁冬期初登攀
		10.チョモランマ	8,848	1988.5.5	北→南へ初縦断
		11.シシャパンマM	8,027	1988.10.24	北東稜
		12.チャー・オユー	8,201	1988.11.6	北西面 HAT-T
02	名塚秀二 Nazuka Hideji 1954.11.生 8座9回 (75,275m) 冬期1回 初登攀2回	1.サガルマータ	8,848	1985.10.30	南東稜
		2.チョゴリ	8,611	1990.8.9	北西壁下部初登攀
		3.カンチェンジュンガM	8,586	1991.5.24	北東支稜
		4.チャー・オユー	8,201	1993.10.8	北西面
		5.サガルマータ	8,848	1993.12.18	冬期南西壁初登攀
		6.ガッシャーブルムI	8,068	1997.7.7	北稜
		7.ガッシャーブルムII	8,035	1997.7.14	南西稜
		8.シシャパンマM	8,027	1999.10.29	北稜
		9.ブロード・ピークM	8,051	2000.7.29	西稜
03	尾崎隆 Ozaki Takashi 1952.9.生 6座7回 (59,020m) 初登攀1回 冬期1回	1.ブロード・ピークM	8,051	1977.8.8	西稜 ★
		2.チョモランマ	8,848	1980.5.10	北西壁下部初登攀
		3.マナスル	8,163	1981.10.12	北東面
		4.ローツェ	8,516	1983.10.9	西面 ★
		5.サガルマータ	8,848	1983.12.16	冬期第三登
		6.カンチェンジュンガM	8,586	1984.5.19	南西面
		7.シシャパンマC	8,008	1986.9.10	北東稜
04	山本篤 Yamamoto Atsushi 1962.10.生 6座6回 (50,313m) 初登攀1回	1.シシャパンマM	8,027	1988.10.24	北東稜
		2.チャー・オユー	8,201	1988.11.6	北西面
		3.サガルマータ	8,848	1989.10.13	南東稜
		4.マカルー	8,463	1995.5.21	東稜下部初登攀
		5.K2	8,611	1996.8.14	南南東リブ
		6.マナスル	8,163	1997.10.8	北東面
05	田辺治 Tanabe Osamu	1.ガッシャーブルムII	8,035	1990.7.26	南西稜
		2.ブロード・ピークM	8,051	1993.8.24	西稜

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
	1961.1. 生 6座6回 (50,209m) 冬期1回	3.チョー・オユー 4.サガルマータ 5.マカルー 6.K2	8,201 8,848 8,463 8,611	1993.10.11 1993.12.20 1995.5.21 1997.7.19	北西面 冬期南西壁 HAT-T 東稜下部初登攀 西壁上部初登攀
06	谷川太郎 Tanigawa Taro 1967.6. 生 6座6回 (49,947m) 初登攀1回	1.ブロード・ピークM 2.ガッシャーブルムII 3.マカルー 4.K2 5.カンチェンジュンガM 6.チョー・オユー	8,051 8,035 8,463 8,611 8,586 8,201	1991.7.12 1993.7.22 1995.5.22 1996.5.22 1998.5.15 1999.9.28	西稜 南稜 東稜下部初登攀 南南東リブ 北面 HAP無し 北西面
07	石川富康 Ishikawa Tomiyasu 1936.11. 生 6座6回 (49,422m) 全て50歳代	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ダウラギリI 4.シシャパンマC 5.マナスル 6.ガッシャーブルムII	8,201 8,848 8,167 8,008 8,163 8,035	1991.9.28 1994.5.13 1994.10.1 1995.9.26 1996.9.27 1998.7.22	北西面 54歳 南稜 57歳 北東稜 57歳 北東稜 58歳 北東面 59歳 南西稜 61歳
08	近藤和美 Kondo Kazuyoshi 1941.11. 生 6座6回 (49,401m) 全て50歳代	1.チョー・オユー 2.シシャパンマC 3.ダウラギリI 4.チョモランマ 5.ナンガ・パルバット 6.ブロード・ピークM	8,201 8,008 8,167 8,848 8,126 8,051	1992.9.20 1994.5.18 1995.10.6 1998.5.22 1999.7.29 2000.7.30	北西面 50歳 北東稜 52歳 北東稜 53歳 北稜 56歳 西面 57歳 西稜 58歳
09	小西浩文 Konishi Hirobumi 1962.3. 生 6座6回 (48,530m)	1.シシャパンマC 2.ブロード・ピークM 3.ガッシャーブルムII 4.チョー・オユー 5.ダウラギリI 6.ガッシャーブルムI	8,008 8,051 8,035 8,201 8,167 8,068	1982.10.10 1991.7.30 1993.7.31 1995.5.9 1997.5.31 1997.7.16	北東稜 20歳 西稜 南西稜 北西面 北東稜 北稜
10	×三枝照雄 Saegusa Teruo 1957.10. 生 4座5回 (42,015m)	1.サガルマータ 2.アンナプルナI 3.チョモランマ 4.シシャパンマM 5.チョー・オユー	8,848 8,091 8,848 8,027 8,201	1985.10.30 1987.12.20 1988.5.5 1988.10.24 1988.11.6	南東稜 南壁冬期初登攀 北稜 北東稜 北西面 HAT-T
11	三谷統一郎 Nitani Toichiro 1958.3. 生 5座5回 (41,965m)	1.ダウラギリI 2.カンチェンジュンガM 3.チョー・オユー 4.サガルマータ 5.マナスル	8,167 8,586 8,201 8,848 8,163	1982.10.17 1984.5.5 1985.10.3 1989.10.13 1997.10.8	北東稜 南西面 南峰～中央峰縦走 北西面 ★ 南東稜 北東面
12	尾形好雄 Ogata Yoshio 1948.7. 生 5座5回 (41,640m)	1.ヤルン・カン 2.チョー・オユー 3.サガルマータ 4.ガッシャーブルムII 5.ブロード・ピークM	8,505 8,201 8,848 8,035 8,051	1981.5.9 1993.10.8 1993.12.22 1997.7.8 1997.7.20	南東面 ★ 北西面 冬期南西壁 南西稜 西稜



番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
13	江塚進介 Ezuka Shinsuke 1961.4. 生 5座5回 (41,203m)	1.ブロード・ピークM 2.チョー・オユー 3.サガルマータ 4.ガッシャーブルムI 5.ガッシャーブルムII	8,051 8,201 8,848 8,068 8,035	1993.8.24 1993.10.11 1993.12.20 1997.7.7 1997.7.14	西稜 北西面 冬期南西壁 H A T - T 北稜 南西稜
14	星野龍史 Hoshino Rushi 1967.11. 生 5座5回 (41,179m)	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ガッシャーブルムI 4.ガッシャーブルムII 5.シシャパンマM	8,201 8,848 8,068 8,035 8,027	1993.10.8 1993.12.22 1997.7.7 1997.7.14 1999.10.29	北西面 冬期南西壁 北稜 南西稜 北東稜
15	後藤文明 Goto Fumiaki 1965.5. 生 5座5回 (41,162m)	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ガッシャーブルムII 4.ブロード・ピークM 5.シシャパンマM	8,201 8,848 8,035 8,051 8,027	1993.10.8 1993.12.18 1997.7.8 1997.7.20 1999.10.29	北西面 冬期南西壁初登攀 南西稜 西稜 北東稜
16	宮崎勉 Miyazaki Tsutomu 1947.11. 生 5座5回 (40,987m)	1.ダウラギリI 2.ローツェ 3.チョー・オユー 4.ガッシャーブルムI 5.ガッシャーブルムII	8,167 8,516 8,201 8,068 8,035	1978.10.19 1983.10.10 1993.10.12 1997.7.9 1997.7.14	南東稜初登攀 西面 北西面 北稜 南西稜
17	北村俊之 Kitamura Toshiyuki 1962.8. 5座5回 (40,613m)	1.ブロード・ピークM 2.ダウラギリI 3.ガッシャーブルムI 4.ナンガ・パルバット 5.チョー・オユー	8,051 8,167 8,068 8,126 8,201	1995.7.19 1997.5.31 1997.7.16 1998.8.5 1999.10.1	西稜 N~Cから縦走 北東稜 北稜 西面 北西面
18	×加藤保男 Kato Yasuo 1949.3. 生 (34,707m)	1.サガルマータ 2.チョモランマ 3.マナスル 4.サガルマータ	8,848 8,848 8,163 8,848	1973.10.26 1980.5.3 1981.10.14 1982.12.27	秋期初登頂 北稜 北東面 冬期第二登 ↓
19	重廣恒夫 Shigehiro Tsuneo 1947.10. 生 (33,992m)	1.K2 2.チョモランマ 3.カンチェンジュンガC 4.ブロード・ピークM	8,611 8,848 8,482 8,051	1977.8.8 1980.5.10 1984.5.18 1985.8.12	第二登 南東稜 北西壁下部初登攀 南峰から縦走 西稜
20	遠藤晴行 Endo Haruyuki 1957.2. 生 (33,077m)	1.サガルマータ 2.ナンガ・パルバット 3.ガッシャーブルムI 4.ガッシャーブルムII	8,848 8,126 8,068 8,035	1983.10.8 1988.7.12 1989.7.12 1990.7.26	南東稜 西面 北稜 南西稜
21	倉橋秀都 Kurahashi Hidetoshi 1960.2. 生 (33,033m)	1.シシャパンマC 2.チョモランマ 3.ナンガ・パルバット 4.ブロード・ピーク	8,008 8,848 8,126 8,051	1994.5.18 1998.5.18 1999.7.27 2000.7.26	北東稜 北稜 西面 西稜

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
22	山野井泰史 Yamanoi Yasushi 1965.4. (32,898m)	1.ブロード・ピークM	8,051	1991.7.30	西稜
		2.ガッシャーブルムⅡ	8,035	1993.7.31	南西稜
		3.チャー・オユー	8,201	1994.9.23	南西稜、単独初登攀A P
		4.K2	8,611	2000.7.30	南々東リブ、単独 ●
23	戸高雅史 Todaka Masafumi 1961.12. 生 (32,823m)	1.ナンガ・バルバット	8,126	1990.8.18	南西稜
		2.ガッシャーブルムⅡ	8,035	1993.7.31	南西稜
		3.ブロード・ピークM	8,051	1995.7.19	N～Cから縦走
		4.K2	8,611	1996.7.29	南東稜単独 ●
24	山野井 妙子 Yamanoi Taeko 1956.3. 生 (32,750m)	1.ブロード・ピークM	8,051	1991.7.30	西面 ※旧姓長尾
		2.マカルー	8,463	1991.10.7	北西稜 ●
		3.ガッシャーブルムⅡ	8,035	1993.7.31	南西稜
		4.チャー・オユー	8,201	1994.9.25	南西壁 アルパイン・スタイル
25	吉田文江 Yoshida Fumie 1955.10. 生 (32,454m)	1.ガッシャーブルムⅡ	8,035	1988.8.8	南西稜 ※旧姓木村
		2.ダウラギリⅠ	8,167	1990.10.9	北東稜
		3.チャー・オユー	8,201	1993.10.12	北西面
		4.ブロード・ピークM	8,051	1997.7.16	西稜
26	谷口 守 Taniguchi Mamoru 1948.12. (32,446m)	1.ナンガ・バルバット	8,126	1983.7.31	西面 ★
		2.ブロード・ピークM	8,051	1988.8.13	西稜
		3.チャー・オユー	8,201	1992.9.20	北西面
		4.ガッシャーブルムⅠ	8,068	1994.8.12	北稜
27	遠藤由加 Endo Uka 1966.1. 生 (32,430m)	1.ナンガ・バルバット	8,126	1988.7.12	西面
		2.ガッシャーブルムⅠ	8,068	1989.7.12	北稜
		3.ガッシャーブルムⅡ	8,035	1990.7.26	南西稜
		4.チャー・オユー	8,201	1994.9.25	南西壁 アルパイン・スタイル
28	川村晴一 Kawamura Haruichi 1947.12. 生 (26,045m)	1.カンチェンジュンガM	8,586	1980.5.14	北壁 初登攀 ●★
		2.チョゴリ	8,611	1982.8.15	北稜 初登攀 ●
		3.サガルマータ	8,848	1983.10.8	南東稜 ●
29	村上和也 Murakami Kazunari 1955.3. 生 (25,975m)	1.ローツェ	8,516	1983.10.19	西面 ★
		2.サガルマータ	8,848	1983.12.16	南東稜 冬期第三登
		3.K2	8,611	1985.7.24	南東稜
30	竹内洋岳 Takeuchi Hirotake 1971.1. 生 (25,922m)	1.マカルー	8,463	1995.5.22	東稜 下部初登攀
		2.チョモランマ	8,848	1996.5.17	北稜
		3.K2	8,611	1996.8.14	南南東リブ
31	貫田宗男 Nukita Muneo 1951.3. 生 (25,897m)	1.チョモランマ	8,848	1991.5.27	北稜
		2.サガルマータ	8,848	1994.10.10	南東稜
		3.チャー・オユー	8,201	1998.9.26	北西面
32	今村裕隆 Imamura Hirotake 1959.4. 生 (25,660m)	1.チョゴリ	8,611	1990.8.9	北西壁 下部初登攀
		2.カンチェンジュンガM	8,586	1991.5.24	北東支稜
		3.マカルー	8,463	1991.10.5	北西稜
33	×吉野 寛 Yoshino Hiroshi 1950.2. 生 (25,626m)	1.ダウラギリⅠ	8,167	1978.5.11	南稜
		2.チョゴリ	8,611	1982.8.14	北稜 初登攀
		3.サガルマータ	8,848	1983.10.8	南東稜 ↓●

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
34	× 禿 博 信 Kamuro Hironobu 1951.10. 生 (25,626m)	1. ダウラギリ I 2. チョゴリ 3. サガルマータ	8,167 8,611 8,848	1981. 6. 2 1982. 8. 15 1983.10. 8	北東稜 単独 北稜 南東稜
35	坂 本 正 治 Sakamoto Shiyoji 1959.10. 生 (25,565m)	1. ローツェ 2. チョモランマ 3. チョー・オユー	8,516 8,848 8,201	1997.10.21 1998. 5. 18 1999. 9. 26	西面 北稜 北西面
36	八木原 罔 明 Yagihara Kuniaki 1946.11. 生 (25,554m)	1. ヤルン・カン 2. サガルマータ 3. チョー・オユー	8,505 8,848 8,201	1981. 5. 9 1985.10.30 1993.10.12	南東面 日本人初登頂 南東稜 北西面
37	山 本 宗 彦 Yamamoto Munehiko 1959.12. 生 (25,362m)	1. ブロード・ピーク M 2. チョモランマ 3. マカルー	8,051 8,848 8,463	1985. 8. 12 1988. 5. 5 1995. 5. 22	西稜 北稜 東稜下部
38	続 素 美 代 Tsunami Sumiyo 1967.12. 生 (25,250m)	1. チョー・オユー 2. チョー・オユー 3. チョモランマ	8,201 8,201 8,848	1992. 8. 15 1996. 9. 27 1998. 5. 25	北西面 北西面 北稜
39	澤 田 実 Sawada Minoru 1968. 7. 生 (25,141m)	1. ダウラギリ I 2. ナンガ・パルバット 3. チョモランマ	8,167 8,126 8,848	1995.10. 4 1997. 7. 7 1998. 5. 19	北東稜 西面 北稜
40	佐 藤 光 由 Sato Mitsuyoshi 1961. 4. 生 (25,100m)	1. サガルマータ 2. チョー・オユー 3. ブロード・ピーク M	8,848 8,201 8,051	1985.10.30 1993.10. 8 1997. 7. 16	南東稜 北西面 西稜
41	田 部 井 淳 子 Tabei Junko 1939. 9. 生 (25,076m)	1. サガルマータ 2. シシャバンマ M 3. チョー・オユー	8,848 8,027 8,201	1975. 5. 19 1981. 4. 30 1996. 9. 20	南東稜 女性初登頂 北東稜 北西面 56歳
42	長 久 保 浩 司 Nagakubo Koji 1969. 4. 生 (24,847m)	1. ガッシャーブルム II 2. K 2 3. チョー・オユー	8,035 8,611 8,201	1993. 7. 22 1996. 8. 14 1999. 9. 28	南稜 南々東リブ 北西面
43	× 斎 藤 安 平 Saito Yasuhira 1953. 1. 生 (24,421m)	1. ダウラギリ I 2. マナスル 3. アンナプルナ I	8,167 8,163 8,091	1982.10.18 1985.12.14 1987.12.20	北西稜 初登攀 北東面 アルパイン・スタイル 南壁 冬期初登攀
44	渡 邊 玉 枝 Watanabe Tamae 1938.11. 生 (24,403m)	1. チョー・オユー 2. ダウラギリ I 3. ガッシャーブルム II	8,201 8,167 8,035	1991. 9. 28 1994.10. 1 1998. 7. 22	北西面 52歳 北東稜 55歳 南西稜 59歳
45	× 根 津 皖 一 Nezu Yoshikazu 1939.12. 生 (24,403m)	1. チョー・オユー 2. ダウラギリ I 3. ガッシャーブルム II	8,201 8,167 8,035	1991. 9. 28 1994.10. 1 1998. 7. 22	北西面 51歳 北東稜 54歳 南西稜 58歳
46	× 小 西 政 継 Konishi Masatsugu 1938.11. 生 (24,338m)	1. ダウラギリ I 2. シシャバンマ C 3. マナスル	8,167 8,008 8,163	1994.10. 1 1995. 9. 26 1996. 9. 30	北東稜 55歳 北東稜 56歳 北東面 57歳
47	× 佐 藤 正 倫 Sato Masamichi 1963. 8. 生 (24,212m)	1. ナンガ・パルバット 2. ブロード・ピーク M 3. ガッシャーブルム II	8,126 8,051 8,035	1990. 7. 24 1991. 7. 12 1993. 7. 31	西面 西稜 南稜

〔2回登頂者〕中村省爾ら48名 〔1回登頂者〕今西寿雄ら261名 八千メートル峰登頂者実人数356名

# 八千メートル峰の記録

(2000年12月31日現在 山森欣一作成)

## I. 初登頂

マナスル 1956 日本山岳会 (今西寿雄、ソナム・ギャルツェン)

## II. 第二登

- |            |      |           |                 |      |        |
|------------|------|-----------|-----------------|------|--------|
| 1) マカルー    | 1970 | 日本山岳会東海支部 | 5) ブロード・ピークM    | 1977 | 愛知学院大学 |
| 2) ダウラギリ I | 1970 | 同志社大学     | 6) カンチェンジュンガ南峰  | 1984 | 日本山岳会  |
| 3) マナスル    | 1971 | 東京都山岳連盟   | 7) カンチェンジュンガ中央峰 | 1984 | 日本山岳会  |
| 4) K 2     | 1977 | 日本山岳協会    |                 |      |        |

## III. 最年少登頂者

最高峰エヴェレスト 重川英介 (チョモランマ) 1996. 5. 11登頂 21歳と166日  
その他の八千米峰 田島崇行 (ガッシャーブルム II) 1997. 7. 14登頂 20歳と155日

## IV. 最高齢登頂者

最高峰エヴェレスト 山本俊雄 (チョモランマ) 2000. 5. 19登頂 63歳と311日  
その他の八千米峰 平田恒雄 (チョー・オユー) 2000. 5. 12登頂 65歳と100日

## V. ハットトリック (暦年一年間で3座登頂) ●印は無酸素

- 1) ×山田 昇 (35歳) 1985年  
7/24 K 2 (●) 10/30 サガルマータ (●) 12/14 マナスル
- 2) ×山田 昇 (38歳) 1988年  
5/5 チョモランマ 10/24 シシャパンマM 11/6 チョー・オユー
- 3) ×三枝照雄 (31歳) 1988年  
5/5 チョモランマ 10/24 シシャパンマM 11/6 チョー・オユー
- 4) 田辺 治 (32歳) 1993年  
8/24 ブロード・ピークM 10/11 チョー・オユー  
12/20 サガルマータ
- 5) 江塚進介 (32歳) 1993年  
8/24 ブロード・ピークM 10/11 チョー・オユー  
12/20 サガルマータ

## VI. 冬期登頂者

- 1) ×山田 昇 1983 (サガルマータ) 1985 (マナスル) 1987 (アンナプルナ I)
- 2) ×斎藤安平 1985 (マナスル) 1987 (アンナプルナ I)
- 3) 小泉章夫 1982 (ダウラギリ I) 4) 尾崎 隆 1983 (サガルマータ)
- 5) 村上和也 1983 (サガルマータ) 6) ×三枝照雄 1987 (アンナプルナ I)
- 7) ×小林俊之 1987 (アンナプルナ I) 8) 名塚秀二 1993 (サガルマータ)
- 10) 後藤文明 1993 (サガルマータ) 11) 田辺 治 1993 (サガルマータ)
- 12) 江塚進介 1993 (サガルマータ) 13) 尾形好雄 1993 (サガルマータ)
- 14) 星野龍史 1993 (サガルマータ)

## VII. アルパイン・スタイル

- 1) ×禿 博信 1981 (ダウラギリ I) 北東稜通常ルート、単独
- 2) ×山田 昇 1985 (マナスル) 北東面通常ルート、冬期
- 3) ×斎藤安平 1985 (マナスル) 北東面通常ルート、冬期



- 4) 山野井泰史 1994 (チョー・オユー) 南西壁新ルート、単独
- 5) 山野井妙子 1994 (チョー・オユー) 南西壁スイス/ポーランドルート
- 6) 遠藤由加 1994 (チョー・オユー) 南西壁スイス/ポーランドルート
- 7) 戸高雅史 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 8) 北村俊之 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 9) 服部 徹 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 10) 戸高雅史 1996 (K 2) 南東稜
- 11) 山野井泰史 2000 (K 2) 南々東リブ

#### VIII. 単独

- 1) ×禿 博信 1981 (ダウラギリ I) 北東稜
- 2) 山野井泰史 1994 (チョー・オユー) 南西壁新ルート
- 3) 戸高雅史 1996 (K 2) 南東稜
- 4) 山野井泰史 2000 (K 2) 南々東リブ

#### IX. 縦走

- 1) 重廣恒夫、和田城志、三谷統一郎 1984 (カンチェンジュンガ南峰→中央峰)
- 2) 戸高雅史、北村俊之、服部徹 1995 (ブロード・ピーク中央峰→主峰)

#### X. 初登攀ルート

- 1) マカルー 南東稜 (1970年春) 日本山岳会東海支部
- 2) マナスル 西稜 (1971年春) 東京都山岳連盟
- 3) ダウラギリ I 南稜 (1978年春) イエティ同人
- 4) ダウラギリ I 南東稜 (1978年秋) 群馬県山岳連盟
- 5) チョモランマ 北西壁下部 (1980年春) 日本山岳会
- 6) カンチェンジュンガM 北壁 (1980年春) 山学同志会
- 7) K 2 西稜→西壁→南南東稜 (1981年夏) 早稲田大学
- 8) アンナプルナ I 南壁 (1981年秋) イエティ同人
- 9) チョゴリ 北稜→北面 (1982年夏) 日本山岳協会
- 10) ダウラギリ I 北西稜 (1982年秋) カモシカ同人
- 11) ガッシャーブルム I 北稜下部クーロアール (1986年夏) 登歩渓流会
- 12) チョゴリ 北西壁下部→北面 (1990年夏) 横浜山岳協会
- 13) チョー・オユー 南西壁 (1994年秋) 山野井泰史
- 14) マカルー 東稜下部→北西稜 (1995年春) 日本山岳会
- 15) ナンガ・パルバット 北面下部→東稜 (1995年夏) 千葉工業大学
- 16) K 2 西稜→西壁上部 (1997年夏) 日本山岳会東海支部

#### XI. 五大峰のうち3座登頂者

- 1) ×山田昇 (1981カンチェンジュンガM、1983ローツェ、1983サガルマータ、1985K 2、1985サガルマータ、1988チョモランマ)
- 2) 尾崎 隆 (1980チョモランマ、1983ローツェ、1983サガルマータ、1984カンチェンジュンガM)
- 3) 名塚秀二 (1985サガルマータ、1990チョゴリ、1991カンチェンジュンガM、1993サガルマータ)
- 4) 川村晴一 (1980カンチェンジュンガM、1982チョゴリ、1983サガルマータ)
- 5) 村上和也 (1983ローツェ、1983サガルマータ、1985K 2)
- 6) エヴェレスト、K 2、マカルー (山本篤、田辺治、竹内洋岳)
- 7) K 2、カンチェンジュンガM、マカルー (今村裕隆、谷川太郎)

## ■ 寸 感 ■

韓国の岳人が2人、昨年と今年相い次いで八千メートル峰14座登頂に成功したと報道されている。その都度、日本のマスコミから照会が入る。誰がそのことを証明できるのだろうか。メスナーやククチカの時代ならいざ知らず、もう十指に余る岳人が14座に到達しようとしている。わざわざその事を目標にして登頂するのなら、社会一般が納得する証しをもって自らが証明するぐらいの気概が欲しいところだ。七大大陸最高峰も同じ。(山森)

## 事務局日誌 (8月)

- 3日(金) アテネ書房来会し、「ヒマラヤへの挑戦④」の出版協議
- 6日(月) CMAヘヤンラ・カンリ隊費用送金
- 8日(水) ネパール登山の手引・第3版発行
- 9日(木) ヒマラヤ358号発送
- 10日(金) ヤンラ・カンリ隊ビザ申請
- 15日(水) CMAヘヤンラ・カンリ隊費用送金

- 16日(木) CMAヘヤンラ・カンリ隊日程表、パッキングリスト送付
- 17日(金) TH Iヘヤンラ・カンリ隊別送品通関関係書類提出
- 20日(月) ニンチン・カンサ隊下山連絡入る。
- 25日(土) ニンチン・カンサ隊全員帰国
- 27日(月) 東京集会 (14名)
- 29日(水) ヤンラ・カンリ隊隊荷発送  
同人パハール壮行会、池袋、山森

## ヒマラヤ No.359 (10月号)

平成13年9月10日印刷 13年10月1日発行  
 発行人 山森欣一  
 編集人 山森欣一  
 発行所 日本ヒマラヤ協会  
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7  
 萬栄ビル501号  
 電話 03-3988-8474  
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



## ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター  
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階  
 TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510  
 (隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

# TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



**マウンテントラベル株式会社**  
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

**☎03-3574-8880**

三井航空サービス代理店2452号

## 遙かなる高みへ



トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・  
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・  
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

**キャラバンデスク**

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)  
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966



**株式会社 西遊旅行**

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル  
(通話料無料) をご利用下さい。

**☎0120-811395**

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1ブルーカ3B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004